

〔資料紹介〕

鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題

新名主 健 一

(一九八七年十月十四日 受理)

I

一、単行本・雑誌

- 1、「日本の方言」柴田武 岩波新書 一九五八
- 2、「実践国語」第十五卷第一六五号 穂波出版社 一九五四
- 3、「言語指導」上甲幹一 朝倉書店 昭和三十二年
- 4、「方言学講座 第四卷」東京堂 昭和三十六年
- 5、「吉嶺勉先生遺稿集」吉嶺勉先生遺稿集刊行会・昭和五十七年

二、研究冊子

- 1、「標準語指導と新教育」川尻中学校 昭和二十九年
- 2、「はなしことば」春山小学校 昭和二十九年
- 3、「はなしことば特設指導計画」徳光小学校 昭和二十九年
- 4、「共通語指導と学習効果」徳光小学校 昭和三十年
- 5、「共通語指導の実際」川尻小学校 昭和三十二年
- 6、「話しことば指導研究会」鹿児島県国語教育研究会・喜入町教育委員会 昭和三十四年
- 7、「話言葉カリキュラム(四月〜七月)」喜入町 前之浜小学校 昭和三十四年

新名主・鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題

三、テキスト

- 8、「話言葉カリキュラム(九月〜三月)」喜入町 前之浜小学校 昭和三十四年
- 9、「話しことば指導の歩み」船津小 昭和三十二年
- 10、「はなし指導書」贈呷郡大崎町大丸小学校 昭和三十六年度
- 11、「昭和三十六年度 研究 話しことば指導の歩み」大崎町大丸小学校 昭和三十六年度
- 1、「話言葉改善指導書」鹿児島県話言葉改善委員会 昭和十八年
- 2、「^注續 話言葉改善指導書」昭和十九年五月
- 3、「ことばのほん」徳光小学校 昭和二十一年
- 4、「ことばの本」指導書
秋田標準語教育委員会編
秋田縣國語教育研究会編
- 5、「ことばのほん 小学校低学年用」
鹿児島県国語教育研究会
鹿児島県教育委員会 昭和三十一年
- 6、「ことばのほん 小学校高学年用」

鹿児島県国語教育研究会

鹿児島県教育委員会 昭和三十一年

7、「ことばのほん」 鹿児島県国語教育研究会・鹿児島県教育委員会
昭和三十三年

8、「ことばの本 指導書」 鹿児島県国語教育研究会・鹿児島県教育
委員会 昭和三十三年

9、「はなしことばの本」 鹿児島市八幡小学校編 昭和三十三年

10、「話言葉改善指導書」 鹿児島県話言葉改善委員会 八幡小学校
増冊

11、「話しことば」テキスト 甌島地区広報協議会 昭和三十四年

四、実践記録および配布資料(西村義雄氏所有——開聞町川尻在)

1、「話し言葉」^{注三} 西村義雄 昭和二十九年 徳光中

2、「ことば指導」西村義雄 昭和二十九年〜昭和三十三年 徳光中

3、「ことば関係資料」西村義雄 昭和三十三年 東郷小

4、「ことば」西村義雄 昭和三十四年 上甌中

5、「ことば」西村義雄 昭和四十一年

五、共通語指導をとり上げた雑誌

1、「鹿児島^{注四} 国語教育 第六号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二
十八年五月

2、「国語通信 第八号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二十九年

3、「国語通信 No.9」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二十九年

4、「国語通信 10」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十年

5、「国語通信 No.14」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十三年

6、「鹿児島 国語教育 第六号 特集共通語指導」 鹿児島県国語教
育研究会 昭和三十三年六月

7、「国語通信 第二十一号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十五

年

8、「国語通信 第25号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十七年

六 論文その他

1、「標準語研究を終りて」 床次國治 「コトバ」^{補注二}第五卷第三號 昭和
十八年三月

2、「標準語研究の一年」・吉嶺勉 1と同じ。

3、「標準語研究を終りて」・橋口正則・1と同じ。

4、「標準語指導の方法」・蓑手重則 「国語通信 第九号」 昭和二十
九年

5、「方言と共通語」・宮原英光 「国語通信 第九号」昭和二十九年

6、「共通語とその指導」・「国語通信 第八号」昭和二十九年

7、「誰でもできる共通語の指導」・暁豊俊・「国語通信 第九号」 昭
和二十九年

8、「共通語班記録」・「国語通信 10」昭和三十年

9、「方言と標準語」・「国語通信 No.14」昭和三十三年

10、「話しことば指導研究会」・「国語通信第二十一号」昭和三十五年

11、「わが校の共通語指導の実際」 飯牟礼小・福添喜信・「国語通信 第
二十一号」昭和三十五年

12、「学力の向上をめざすことば指導」前之浜小 西元四男 「国語通
信 第二十一号」昭和三十五年

13、「大丸校話しことば指導研究会」・「国語通信 第二十五号」昭和三
十七年

14、「話しことば指導の実際」大丸小 松元二夫 「国語通信 第二十五
号」昭和三十七年

15、「私のはなしことば指導について」田崎小 上谷俊郎 「国語通信

- 第二十五号」昭和三十三年
- 16、「わたしたちの共通語指導」大根占小 平嶺薫 「国語通信 第二十五号」昭和三十七年
- 17、「アクセント指導に於ける一つの留意点」木之下正雄 「鹿児島国語教育第二号」昭和二十九年
- 18、「私の共通語指導」川畑長生 「鹿児島国語教育 第二号」昭和二十九年
- 19、「アクセント教育」^{注五}西村義雄 「鹿児島国語教育 第三号」昭和三十年
- 20、「標準語指導と新教育」上原森芳 「鹿児島国語教育 第三号」昭和三十年
- 21、「話すこと聞くことにおける目標の分類とその指導」今奈良重則 「鹿児島国語教育 第三号」昭和三十年
- 22、「聞くことの指導について」横山貞作 「鹿児島国語教育 第四号」昭和三十一年
- 23、「共通語指導原理」蓑手重則 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 24、「共通語指導の史的展開」吉嶺勉 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 25、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」床次国治 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 26、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」福添喜信 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 27、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」榎園国郷 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 28、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」山崎馨 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 29、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」辛島康男 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 30、「わたしたちの学校の標準語指導の実際」吉松徹 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 31、「アクセントの学習について」仲田寿男 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 32、「アクセント指導の実際」黒木優 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 33、「アクセント指導の実際」上原森芳 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 34、「若い人々のために」西村義雄 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 35、「朗読指導の理論と実際」南郷有徳 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 36、「共通語指導の態勢」米満繁達 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 37、「共通語指導の態勢」山崎馨 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 38、「共通語指導の態勢」浜田益雄 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 39、「わたしの共通語指導の実際」福富哲雄 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 40、「わたしの共通語指導の実際」前野繁 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年
- 41、「共通語指導 特に敬語指導について」有村正照 「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年

- 語教育 第六号 昭和三十三年
- 42、「わたしの共通語指導の実践」 西元四男 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 43、「ことばの本の効果的指導」 吉村次雄 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 44、「入門期の共通語指導の実践」 稲田信子 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 45、「共通語指導の具体的方法」 暁豊俊 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 46、「健全な共通語の成長のために」 川畑長生 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 47、「鹿児島県国語教育研究会の歩み」 南郷有徳 「鹿児島 国語教育 第七号」 昭和三十四年
- 48、「国語教育の歩み」 吉嶺勉 「鹿児島 国語教育 第七号」 昭和三十四年
- 49、「ラジオ国語教室の利用」 北山敏男 「鹿児島 国語教育 第十号」 昭和三十七年
- 50、「先生に話しかける児童のことばの実態」 中尾温雄 「鹿児島 国語教育 第十号」 昭和三十七年
- 51、「だれでも気軽にできる話しことば指導」 西元四男 「鹿児島 国語教育 第十三号」 昭和三十八年
- 52、「聞く話すの教科書教材の取扱いについて」 丸山真 「鹿児島 国語教育 第十四号」 昭和三十八年
- 53、「ことばに関する事項の一分野から」 肥後久米規 「鹿児島 国語教育 第二十二号」 昭和四十二年
- 54、「聞き手を意識した話しことばの指導」 原崎尚之 「鹿児島 国語教育 第二十二号」 昭和四十二年
- 55、「聞くこと・話すことの力を充実させるための「ラジオ国語教室」の効果的な指導法の研究」 本伸幸 「鹿児島 国語教育 第二十二号」 昭和四十二年
- 56、「話しことば指導について」 荒田薫 「鹿児島 国語教育 第二十二号」 昭和四十二年
- 57、「話しことば教育史研究——戦時下、鹿児島県のばあい——」 野地潤家 「鳴門教育大学研究紀要」(教育科学編)第一卷(一九八六) 所収
- 58、「共通語と生活語」 棕鳩十(言語教育学叢書第一期六卷言語教育の問題点) 昭和四十二年文化評論出版 所収
- 59、「ことばの指導」 清水美藤次 「鹿児島 国語教育 第二号」 昭和二十九年
- 60、「共通語のニュアンス」 池田隆明 「鹿児島 国語教育 第二号」 昭和二十九年
- 61、「共通語指導のお膳立てということ」 小村秋豊 「鹿児島 国語教育 第三号」 昭和三十年
- 62、「国語教育と共通語指導」 大内山喜三郎 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 63、「共通語指導を顧みて」 萩原英則 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 64、「共通語指導を推進する人たち」 蓑手重則 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 65、「東京府へ出向ヲ命ス」 吉嶺勉 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年
- 66、「話しことば指導を顧みて」 浜田光雄 「鹿児島 国語教育 第六号」 昭和三十三年

六号」昭和三十三年

67、「話しことばの指導について思うこと」竹下降二「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年

68、「愛育時報」桑原静夫「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年

69、「話しことば指導について思うこと」三浦定雄「鹿児島国語教育 第十一号」昭和三十三年

70、「むずかしい話し言葉の指導」小園春子「鹿児島国語教育 第十一号」昭和三十三年

71、「ことばの感覚を大切に」丸野平一郎「鹿児島・国語教育 第十号」昭和三十三年

72、「話しことば学習の必要性」宮下俊一郎「鹿児島国語教育 第十五号」昭和三十三年

73、「共通語指導」小園実満「鹿児島国語教育 第十九号」昭和四十一年

74、「ことばづかいあれこれ」久米文雄「鹿児島国語教育 第二号」昭和四十一年

75、「話しことばの実態とその指導」黒木優「鹿児島国語教育 第二十二号」昭和四十二年

76、「第八回 鹿児島県話しことば指導研究会」「鹿児島国語教育 第十二号」昭和三十八年

文献解題

鹿児島県の話しことば教育史資料の中で基本的文献と思われる六件について解題をつける。

〔二〕「昭和十七年十月 話言葉改善指導書」鹿児島県話言葉改善委員

昭和十八年一月

A 同書の目次は次の通りである。

基礎篇

一、音聲

1、発音に就いて

2、アクセントに就いて

3、抑揚と調子とに就いて

4、アクセント辭典に就いて

5、アクセントの矯正指導に就いて

二、ヨミカタ卷一アクセント教程

三、標準語に就いて

四、方言研究と方言矯正

五、鹿児島方言概観

六、學校用語の改善

指導篇

序説

第一段 讀本の朗讀

一、發音、アクセント、抑揚、言葉調子の基礎的指導

二、朗讀の範讀、模唱

三、朗讀發表會

四、レコード、ラヂオの利用

第二段 基礎的會話の修練

一、「言葉の時間」の特設

二、基礎的會話の選定

第三段 標準語の全面的日常化

- 一、「言葉の時間」の運用
- 二、少年團組織の活用
- 三、家庭、社會の協力

(一一一P)

B (解題)

昭和十六年四月の学制改革により国語教育が転換し「音声言語」が重視されるようになった。読本とやらんで「ことばのおけいこ」が出版され、教師用書での音声面の解説は詳細であった。昭和十七年二月鹿児島県教育研究会の席上、文部省の長岡督学官は講演の中で「大東亜戦に突入したわが国が戦争遂行上の必要上標準語普及の急務」を強調した。このことは「実は大東亜戦争によって大東亜共栄圏を確立し、同時に日本語を公用語として制定しようという、壮大な言語政策的な意図を含んだ」ものであった。当時の加藤学務部長と山口視学は「はなしことば改善」の運動を推進していった。四十五名からなる「鹿児島縣話言葉改善委員会」が組織され、その第一回の会合の時、「アクセントこそ、ことばの指導の背骨である。」との上原森芳氏の言が、「言いまわしだけの指導でよいではないか。」とする説をひっくりかえしてしまっている。昭和十八年十九年における標準語指導のテキストである。後年(特定できない)、八幡小学校から同名の書物が増冊と銘うって出ている。中身はまえがきを簡略にしてある以外同一である。

「二」 「標準語指導と新教育」 川尻中学校 昭和二十九年十一月

A 同書の目次は次の通りである。

信は力なり 校長 有田栄助
 本校の概要

- 一、校歌
- 二、学校沿革
- 三、学級編成
- 四、週行事表
- 五、職員組織
- 六、卒業生動向
- 七、環境の実態

標準語指導と新教育

- 一、私はこんなにして標準語指導をしてきた
- 二、標準語指導と新教育
- 三、標準語指導に対する考察
- 四、本校における自主協同学習の考察
- 五、対等対話の指導
- 六、独話又は目上との対話練習
 - 過去の練習資料
- 七、標準語指導と現在の生徒
- 八、今年度にはいつての歩み
- 九、ことば指導上の呼吸

- 第一学年
- 第二学年

B (解題)

「鹿児島県共通語指導の父」とされる上原森芳は戦前から共通語指導にあたっていた。昭和九年成城学園を辞し(家庭の事情——兄の覺市の死去へ昭和九年)によるものと思われる)、帰鹿。別府尋常高等小・出水尋常高等小・開聞尋常高等小・山川尋常高等小・川尻国民学校等を経て昭和二十四年宮脇小で退職。当時は郷里、川尻中の講師として共通語指導にあたっている。

その共通語指導の契機には、成城学園在職当時、父兄参観でアクセント・イントネーション等のおかしさを指摘されたこと・別府小に赴任した時、「鹿児島県の言葉が如何に不自由であり不通であるかを痛感」したことがあげられる。そして、昭和十六・十七・十八年の川尻国民学校での共通語指導は、当時の国策(大東亜栄園における共通語の普及)とも合致し、昭和十六年二月には文部省の長岡督学官の視察とまでなった。昭和二十九年という共通語指導を始めてから二十年を経ている。この二十年間の実践のまとめとも言うべきものである。

「川尻中学校は六学級であるので、私が一人で国語を担当していたから万事がしやすかった。もちろん学校の職員会生徒会でこれを決議し、国語の時間に朗読調子、発表調子(独話)及びグループによる共同学習の対等対話の指導を一手に引き受けてやった。他の教科のグループ共同学習のし方等も毎週研究会を開いて研究した。こうして学校全体の全教科の学習と音声言語のアクセントを共通語に近づけた。毎朝始業前十五分間全校生徒を校庭に集めて脚本による対話指導をやり、全校の雰囲気を一押し大きな新しい言語の流れをつくった。はじめはおかしがって笑っていたが、だんだん来れて来るにしたがって笑わなくなり、かえって外

来者の方言やそのアクセントを聞いて笑う程になった。この場合職員も生徒と一しょに研修することにし、別に職員の練習を毎朝やったこともあった。それは鹿児島調子と共通語調子との区別、聞き分け、話しわけができる程度のものである。」(「言語指導」上甲幹一・朝倉書店 P二五二—P二五二)

「私はこんなにして標準語指導をしてきた」は、「実践国語」(一九五四・第十五卷第一六五号)に掲載されたもので、「標準語指導に対する考察」は昭和二十九年六月に鹿児島県国語教育研究会での発表原稿である。

さて上原森芳は同書の中で、標準語指導の目標を「発音の標準化から校外・家庭の日常生活にまで」としている。また、「芋普通語は美しい標準語や情味豊かなごしまことばを汚し、第二方言を創造し、且つ方言の侵入を容易ならしめ、遂に又もとへ返る。特に生命的談話や理解は困難である。」としている。

「対等対話の指導」では、分団学習の場におけるくだけた常体(タ・ダ体)の話し方について記している。このことについて養手重則は「戦前の鹿児島県の共通語指導では、公的な場のよそ行きの改まったいねい体の話し方の指導のみを意識し、私的な場のふだん着のくだけた常体の話し方の指導は未だ全く意識されなかったのである。これでは鹿児島県の共通語指導は、学校の生活の場から日常生活の場へ拡げようとしても拡げることではできなかったはずである。〈略……引用者〉戦後の民主主義の話し合い学習において、公的な場のよそ行きの改まったいねい体と、私的なふだん着のくだけた常体の話し方とを、全体学習の場と分団学習の場とに振り分けて指導するという方法を発見したことは、実に画期的な発見であったといわなければならぬ。」(「幾山河」P一一六)と評価している。

